



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	視聴覚クラスにおけるイントネーション意識化の試み : 日本語日本文化研修コース上級クラスの場合
Author(s)	石島, 満沙子; Ishijima, Masako; 小林, 由子 他
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 2, 186-200
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45571
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC002_014.pdf



視聴覚クラスにおける イントネーション意識化の試み —日本語日本文化研修コース上級クラスの場合—

石島満沙子・小林 由子

要 旨

日本語日本文化研修コース上級クラス「視聴覚演習Ⅱ」では、授業目標のひとつに「視聴覚教材を通して口頭表現能力の向上を図る」を挙げている。その主な方法としてテレビなどを録画した生の教材を用い、ディスカッション、ディベートなどで向上をはかってきたが、口頭表現の訓練には不十分な面もあった。そこで、ビデオ教材を使用して口頭表現能力を高めることを目指した授業を行った。主な目標は学習者の課題のひとつであるイントネーションの学習である。授業では、消音ビデオによる登場人物の発話内容の推測、音を伴ったビデオによる解答と実際の発話の照合、言語でしか伝わらない情報の確認、イントネーションに気をつけながらシナリオを読む、ビデオの発話とのイントネーションの対比、イントネーションの模倣、イントネーションに気をつけた会話の作成などをおこなった。その結果、学習者のイントネーションに対する意識が格段に高まった。ビデオ教材の使用と学習活動が学習者のイントネーションへの意識化をうながし、学習への動機づけを高めたと思われる。

〔キーワード〕 意識化、イントネーション、視聴覚クラス、ビデオ教材、日本語日本文化研修コース

1. はじめに

北海道大学の日本語日本文化研修コース上級クラス（Fクラス）の視聴覚演習Ⅱでは授業目標の1つに「視聴覚教材を通して口頭表現能力の向上を図る」を挙げている。その主な方法としてテレビなどを録画した生の教材を用い、ディスカッション、ディベートなどで向上をはかってきた。しかし、口頭表現の訓練には不十分な面もあった。そこで、97年10月期はビデオ教材を使用して口頭表現能力を高めることを目指した。

語彙、表現も増えて文法の誤りもなくなりつつあるこのクラスの学生の場合、イントネーションの改善が課題の一つであった。彼等の口頭表現能力をさらにレベルアップさせる一方策として自己の発話にたいする「気づき」が必要であると考えた。つまり、発話時に、その場面、意図に適した表現手段を選択し、適切な発音、イントネーションで発話することの重要性をはっきり彼等に認識させることによって改善が計れるだろうと考えたのである。

本稿では「学習者の気づき」を養成するために効果的だった授業について記述し、考察を行う。

2. 対象クラスの概要

対象者は北海道大学日本語日本文化研修コース（以下日研コース）上級クラスの（Fクラス）5名（韓国2、モンゴル1、ロシア1、オーストラリア1）である。1997年10月に来日し、いずれも日本語を主専攻として3年前後学んでいる。

日本語日本文化研修生（以下日研生）とは日本以外の国で日本語、日本文化を選考する学部生が1年間日本で研修するという国費留学生のことで、北海道大学留学生センターでは日研生のためのプログラムを提供している。

コースの目的は「日本語のブラッシュアップ及び日本文化、社会へのより深い理解」で、最終的に個々の関心に応じた研究レポート、スピーチの形で研修の成果を示すことになっている。

クラスはレベル別に2クラス（E・Fクラス）設けられている。Fクラスはレベルが高い方のクラスで、日本人向けの新聞、テレビがある程度理解でき、完璧ではないが言いたいことが言える程度のレベルである。日本語能力試験で言えば2級よりやや上と考えられる。

3. 日研コースでの視聴覚クラスの位置付け

日研コースの授業は第Ⅰ期（10月期：10月～2月）と第Ⅱ期（4月期：4月～9月）からなっている。各期はそれぞれ15週である。

授業はクラス毎に行われる必修科目と選択科目に分かれる。Fクラスでは必修科目として「上級日本語講読」、「上級日本語演習」、「視聴覚演習Ⅱ」、「文章表現」がある。第Ⅰ期の授業では統一テーマを定め、各科目そのテ

ーマに沿って授業を進めている。第Ⅱ期ではテーマは定めていない。97年のテーマは、若者、会社、家族、教育、宗教である。

視聴覚演習Ⅱの時間数は50分×2×15週=300時間である。カリキュラム詳細については小林(1997)を参照されたい。

視聴覚授業の目的は①聴解力の改善、②社会的、文化的な知識の獲得、③語彙、表現の獲得、④他者の意見をよく聞き、自分の意見を表現する能力の育成、⑤口頭表現能力の改善である。口頭表現能力の育成は、カリキュラム上この「視聴覚演習Ⅱ」に依存するところが大きい。

主な学習活動は、復習クイズ(前回の語彙・表現等)→話題に関する事前学習→話題に関する新出語彙、表現の確認→ビデオ視聴→内容理解→ディスカッション・ディベート等、を行っている。ここでのビデオ教材はテーマに合ったものをテレビ等から録画したものを多用している。

視聴覚クラスではクラス目標の⑤口頭表現能力の養成が問題となっていた。①～④に関してはある程度部達成されていると思われるが、⑤の口頭表現能力の改善に関しては十分とは言えなかったからである。特にイントネーションは改善されるべき課題の一つであった。

4. 授業の概要

上述のような課題をもっているFクラスの学生に対しイントネーションの改善を目的の一つとした授業を以下のように計画した^{注)}。

まず、どのテーマの時に、どの教材が有効かを検討した結果、「若者」がテーマの時、国立国語研究所編『日本語でだいじょうぶ』の恋人編からセグメント28「お祝いですー贈り物ー」(資料参照)を用いることにした。生教材ではなく教材用に開発されたビデオを使用した理由は、発話意図別に編集され索引の付けられた教材が有効であろうと判断したためである。

このビデオの概要は次のようなものである(シナリオは資料1参照)。
登場人物：村井亜紀子(西北大学3年生、深沢の恋人)、深沢良昭(板橋経済大学4年生、大学の民謡研究会員、就職活動中)、宮田愛(板橋経済大学1年生、民謡研究会で深沢の後輩)

場面：3月のある日、板橋経済大学構内の民謡研究会部室前

あらすじ：亜紀子は深沢に卒業プレゼントを渡そうと待っている。何と言って渡そうかと練習していると、突然、深沢の後輩の宮田が現われ、無遠慮に二人のことを尋ねる。亜紀子は言葉にこず。

間もなく現われた深沢に、亜紀子はプレゼントを渡す。

実施時間数：50×2コマ×2回＝合計200分

学習目的：

第1週目：①非音声的な情報から場面状況、登場人物の関係・感情を推測する

②各国の習慣や各自の考え方の違いを考える

第2週目：①モデル会話のイントネーションと機能を考える

②実際の場面でも①を意識して使えるようにする

第1週目の授業の流れ

前半：1) 他者に情報を伝える手段は何か考える

2) タスクシートを渡し授業のやり方を説明

3) 消音でビデオを通視（1回目）

4) 全体の場面状況、ストーリーを考え、概略を述べる

5) セグメントを4部分に分けて視聴

①亜紀子の場面（42秒）

②亜紀子、宮田の場面（33秒）

③亜紀子の場面（29秒）

④深沢、亜紀子の場面（29秒）

6) 各場面の登場人物の身振り、顔の表情から状況、感情を推測して、シートに書く

7) 推測理由を述べる

8) 登場人物3人の関係を考える

後半：1) 消音でビデオを見て（2回目）、画面に合った会話を作る

2) 画面に合わせて、作成会話を吹き込む（テープに収録）

3) 音声を入れてビデオ視聴（3回目）

4) 各自が作った会話と比較して、非音声的な情報で伝わるもの、伝わらないものを確認する

5) 習慣の違い、考え方の違い等について意見交換

第2週目の授業の流れ（女性2人の会話部分を使用）

前半：1) モデル会話部分の SCRIPT とビデオを見ながら、イントネーションと発話意図を考える

2) モデル会話のイントネーションを模倣

3) 同様の会話例（教師作成）のイントネーション、発話意図

を考え、意識して読む練習をする（クラスを2グループに分けて、活動）

- 後半：1) クラスを2グループに分け、グループごとに与えられた場面、登場人物、状況に合った会話を作成
2) 作成会話をイントネーション、発話意図に気をつけロールプレイを実施、ビデオに撮る
3) フィードバック

5. 実施とその結果

5.1 授業の実際

上述の流れに沿って行った授業についての実際を報告する。

第1週目－前半50分

事前のインプットとして「情報を伝える手段は何か」を考えさせたが、すぐ「言語、動作、顔の表情」が挙げられた。そこで、第1回目の授業の目的である非音声的な情報に注目するために消音でビデオを見る旨を説明した。1回の通視で全員がほぼストーリー、場面状況を把握できた。登場人物の動作、表情がわかりやすかったと思われる。次に、セグメントを4つの場面ごとに分け、さらに詳しく話の内容、その時の登場人物の感情等も推測させ、その推測理由を述べさせた。

亜紀子の宮田に対する不快感や深沢へ自然な形でプレゼントを渡したい気持ち、プレゼントを渡した後の満足感など表情から汲み取れていた。また、宮田の亜紀子をからかうような身振り、表情に興味を持ったようである。消音ビデオでは深沢の表情や態度からは亜紀子の恋人であることが明確ではなく、この時点では3人の関係がまだはっきりわからなかった。

第1週目－後半50分

この時間では、再度消音でビデオを見ながら場面に合った会話を作成した。やりとりが短い発話が多かったので全部会話シートに書き込む作業が難しかった。さらに、その作成会話のセリフを画面に合わせ会話し、それを録音した。亜紀子と宮田の場面では女子学習者2人が感情の動きを表現しようと試みたのは、発話意図とイントネーションに注意が向いているからであろう。その後、有音でビデオを視聴して、非音声的な情報では状況は理解できるが、話の具体的な内容については音声的な情報でなければ伝わらない事を確認した。次に、登場人物の態度などで理解できないところ

について意見を述べさせたり、各国の卒業のプレゼントについて話した。

第2週目－前半50分

亜紀子と宮田2人の場面のシナリオシート（資料1参照）を配り、学生2人にその会話の発話意図、機能を考えながらイントネーションに気を付けて読ませた。次にビデオを視聴し、どのようなイントネーションかを確認した。その後、2人ずつ交代でモデル会話を模倣させたが、意図や機能を十分理解しているにもかかわらず再生が非常に困難であった。また、会話の開始部と終結部にも注意をむけさせた。

第2週目－後半50分

教師が作成した同様の会話（職員室で先生と学生）（資料2参照）を用意し、発話意図、機能を考えたイントネーションでその会話を練習させた。次に、2つのグループに分かれ、与えられた場面、登場人物、状況に合った会話を作成させた。場面は北大生と留学生が週末だけ開いているバー「地球クラブ」で、登場人物もよく知っている仲間同士である。状況は、ある女子学生が地球クラブの1員であるボーイフレンドに誕生日プレゼントを持っていったが、彼は不在だったという状況である。このような条件で会話の中に必ず「答えたくない状況」を作り、「曖昧な返事で事実を述べることを拒否する対応」を入れさせた。各グループで話し合い、実際にイントネーションをつけて発話しながら、会話を作成した。最後に、出来上がった会話を実演し、その様子をビデオ撮影し、各自の身振りやイントネーションを見なおして、意識化を図った。実際には、自然なイントネーションを心がけたようだが難しかった。フィードバックは次回に行った。

5.2 学習者の反応

実施後今回の授業に対して、アンケート調査を行い、感想を聞いた。また、自分の日本語で欠けていることについても聞いてみた。質問1～3までは〔とても面白かった5 まあまあ4 どちらとも3 あまり2 全然1〕の5段階評価で、4～9は自由回答で行った。結果を以下に示す。

1. 授業はおもしろかったか。 [4.6]
2. 授業は役に立ったか。 [4.6]
3. 授業の中で役に立ったことは何か。
 - 1) 音を消したビデオから身振り等だけで場面状況を考える [3.8]
 - 2) 言ってるセリフを考える [3.6]

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 3) ビデオに合わせてセリフを言う | [3.8] |
| 4) 他の人が作ったセリフを聞く | [3.4] |
| 5) 音を出して、自分が作ったセリフや状況を比べる | [3.6] |
| 6) 2人の女の人の会話のイントネーションと機能を考える | [4.0] |
| 7) イントネーションの練習 | [5.0] |
| 8) イントネーションを考えた実際の会話の作成 | [4.6] |
| 9) その他 記述なし | |
| 4. 授業の中で役に立ったことについての理由は何か。 | |
| イントネーションの練習が役に立った理由 | |
| 自信がない | 3名 |
| 日常生活では直してもらう機会がない | 1名 |
| もっと自然な日本語になる | 1名 |
| イントネーションによって意味が違う | 1名 |
| 5. 自分の日本語に欠けているものは何だと思うか。 | |
| 発音・イントネーション | 5名 |
| 語彙・表現 | 4名 |
| 漢字 | 1名 |
| 流暢さ | 1名 |
| 身振りなどの知識 | 1名 |
| 6. 授業でやったことで「これからも勉強したい」と思うこと。 | |
| 正確なイントネーション・発音の練習 | 3名 |
| 待遇表現 | 1名 |
| テレビ番組（ニュースを含めた）の内容理解 | 1名 |
| 特になし | 1名 |
| 7. 授業でやらなかったことでビデオクラスで「勉強したい」こと。 | |
| 多様な番組を通して話す技能を伸ばす | 1名 |
| 多様な番組を通して聞く技能を伸ばす | 1名 |
| 多様な番組を通して書き取ること | 1名 |
| 特になし | 2名 |
| 8. 授業でやったことで「不必要だ」と思うこと。 | |
| 「場面状況を考える」時にビデオを繰り返し見た時間があったいな | |
| い | 1名 |
| 特になし | 1名 |

9. その他授業についての意見。

特になし

5名

使用教材に対しては、「教材用のビデオ」らしい、登場人物の考え方が理解できない、登場人物の身振り、顔の表情が面白い、などの意見がでた。

6. 考察

5で示したように、授業後のアンケートでは、「イントネーションの機能を考える」、「イントネーションの練習」、「イントネーションを考えた会話の作成」という学習活動が高い評価を得た。

また、クラス全員が「自分に欠けていること」として発音・イントネーションをあげた。

授業実施後、ほかの科目でも、それまで見られなかったイントネーションに関する質問が頻発し、自発的に練習するようになったことを考えると、この授業がイントネーションに対する意識化を促した可能性は高い。

本節では、なぜこの授業が学習者の意識化を促したかについて考察を行う。

6.1 ビデオ教材の役割

従来の日研上級クラスでは、ビデオはもっぱら内容理解のために使われていた。すなわち、ここでのビデオ教材は異文化の理解のための情報提示、聞き取り練習の素材などの役割を果たしていた。

しかし、今回の授業では、ビデオ教材は従来とは異なる役割を果たした。授業の流れと、ビデオ教材の役割の関係を図1に示す。

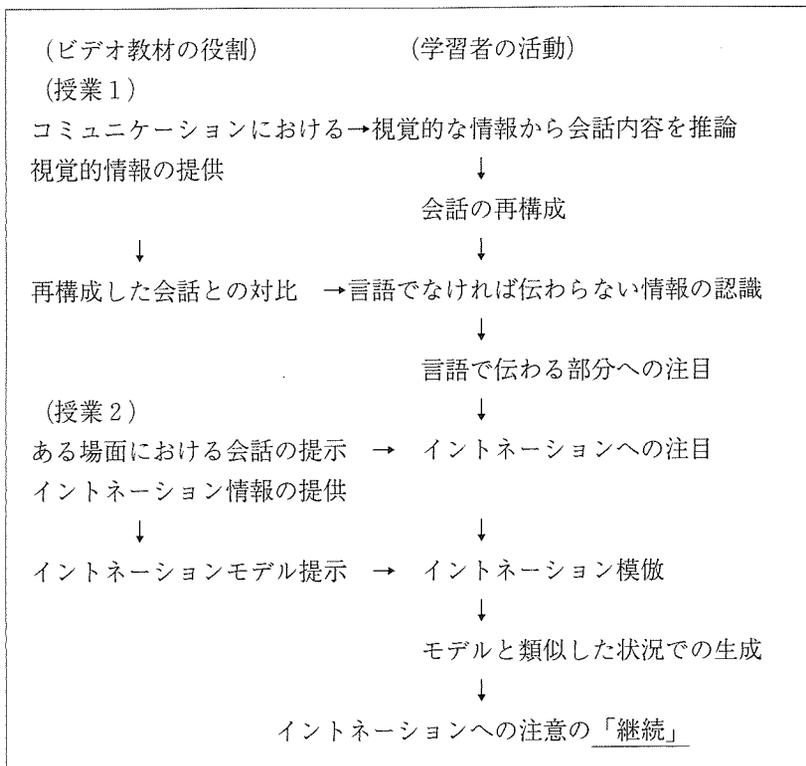


図1 授業の流れとビデオ教材の役割

今回の授業では、ビデオ教材が果たした役割は以下のように大別される。

- 発話内容推測のための手がかり提供
- 学習者が作った会話との照合の対象
- 学習者が作った会話の評価の手段
- 発話のモデル
- 学習者の模倣の評価の手段

この役割は授業が進むにつれ変わっていった。

6.2 ビデオの「消音」の役割

学習者は、まず音を消したビデオにより発話の推測を行った。この推測は主に内容面の推測に焦点が当てられたが、音を伴って再生したビデオを

視聴して自分たちの推測内容との照合を行い内容のずれを認識することにより、映像だけでは伝わらない情報があることに改めて気づくことになった。

映像と音声を同時に提示して話者の意図や心情を理解するときには、その理解が音声によってもたらされたのか、あるいは映像によってもたらされたのか、学習者には判別がつきがたい。消音ビデオの使用は、音声情報と映像情報を分離したことにより、音声でしか伝わらない情報の中のイントネーションへの注目に貢献した。

中道（1998）ではビデオ教材の特徴として映像や音声など情報の多重性をあげているが、この多重性をコントロールすることによって、どんな情報によって自分が理解をしているのかについての学習者の意識化を促すことができるといえよう。

また、文野（1997）では異文化理解における消音ビデオの効果が述べられているが、異文化理解だけではなく、口頭表現能力の育成にも消音ビデオは利用可能である。

6.3 学習活動の役割

学習者のイントネーションの意識化には、学習活動も一助を担っていたといえる。

5.1にも一部を示したが、この授業での学習活動は、映像による発話内容の推測→内容の文字化→映像に伴う音声と推測した内容の照合→言語が表現することへの注目→文字情報（シナリオ）によるイントネーション生成→ビデオモデルとのイントネーションの照合→イントネーションの模倣→自己の模倣とモデルの照合→モデルを離れた生成、という過程を経た。

口頭表現能力を伸ばしていくためには、教室で学ぶだけではなく、自分で学習することも必要である。自己学習能力を育てるためには、自分が何を知らないかに気づくところから始まり、何をどのように学んだらよいかを考え、実行する（無藤 1980）ことが必要である。

学習者による授業評価を見ると、この授業では特にこの「何を知らないかに気づく」効果が大きかったようである。

学習課題の意識化は、「何ができないか」に学習者の焦点をしぼらせることができるため知的的好奇心につながっていく。さらにその課題を自ら解決していく経験をつむことにより、その知的的好奇心は持続する（豊田

1994)。

この授業では、シナリオを読んで自らイントネーションを生成し、ビデオと対照することによって教師がイントネーションに注意を向けさせたあと、ビデオをモデルとしてイントネーションの模倣を行った。自らのイントネーションとモデルの照合をし、模倣がうまくいかないのを発見した結果、学習者自身のイントネーションの問題点が明確となり、学習すべき課題が明らかとなった。

さらに、授業の最終段階で、実際に遭遇しそうな場面でのどのようにイントネーションの操作をするかを考え、それぞれが作った会話を学習者が相互に聞きあった。豊田は、学習課題の学習過程を段階的に確認することによって自分の長所短所をより明確にすることや、自分の行動を他人と重ねて自己評価することが、自己効力感を生み出し高めるとも述べている。授業の最後に行われた活動は、イントネーションの模倣・生成や、お互いの評価により、イントネーション学習への動機づけを高めたといえる。イントネーションに関する学習活動の評価が高かったのは、そのためであろう。

これらの活動が学習者の自己学習のきっかけになった可能性は高い。

7. 今後の課題

今後の課題としてつぎのような事柄があげられる。

1) 教材に関して

イントネーションなど発話意図と密接に結びついた項目を学習する際には、モデルとしても、発話の刺激としても、当該の発話意図を含む場面が複数必要である。このような場面の検索が容易な教材用ビデオの使用はこの点で有益だった。しかし、消音視聴で出演者の演技の未熟さが誤解を生んだ場面もあったので、教材化に困難は伴うが、既成のドラマ、劇映画を発話意図の理解・発話モデルとして使うことも考えられるだろう。発話意図のインデックスがついた複数のビデオ素材の開発が望まれる。

2) 授業に関して

今回の授業は、学習者の学習課題への意識化を促したが、学習課題を認識するだけでなく、学習者が学習段階を自己確認し、自分で課題を解決しながら口頭表現能力を伸ばしていくための取り組みが今後も必要であろう。

注) なお、この授業は、国立国語研究所の「映像モニター」として行われた。本稿はモニター報告に大幅な加筆・訂正を加えたものである。

資料1：使用ビデオのシナリオ

(国立国語研究所日本語教育教材開発室『『日本語でだいじょうぶ』利用の手引き』による)

登場人物：村井亜紀子（西北大学3年生）深沢の恋人

深沢良昭（板橋経済大学4年生、民謡研究会員、就職活動中）

宮田 愛（板橋経済大学1年生、民謡研究会員）

場面：3月中旬の平日午後4時ごろ。板橋経済大学内の民謡研究会部室前。

(亜紀子、深沢を待っている。プレゼントを入れた包みを持っている。見回し、振り向いて後の掲示板に向かってぶつぶつ言い始める。)

亜紀子：これ、(包みを見る) あげます。どうぞ。(首をかしげる) 差し上げます。うーん、変ね。これ、卒業です、じゃない、卒業祝いです。プレゼント！うーんと、気に入ってくださるといいんですけど。ああ、若さがない！気に入って、くれるかな。

(宮田、掲示板の後から突然顔を出す。亜紀子どぎまぎする。)

宮田：(笑う) 深沢先輩ですか。

(亜紀子、顔を赤くする。)

宮田：(亜紀子の持つ包みを見て) プレゼントですか。ネクタイかな。違うな。ベルト！いやっ、お財布！そうでしょう。

亜紀子：(背を向けたまま) え、ええ。まあ。

宮田：深沢先輩、北海道の会社ですって？どうするんですか。

亜紀子：さあ。…別に。

宮田：いっしょに北海道行きたいでしょう。

亜紀子：(ちょっとむっとする) さあ。

宮田：結婚するんですか。

亜紀子：そんな。(にらむ) 関係ないでしょ。

宮田：(笑う) もうそろそろきますよ。

宮田、部室に入って行く。後に残った亜紀子、口をとがらせて見送る。あたりを見回し、もう一度掲示板を振り向く。

亜紀子：(道の方を見やる) 来ないのお？早く来ないと、帰っちゃうから。(包みを見ながら) あと、10、9、8、7、6、…(だんだんゆっく

りになる)

深沢 (オフ) : あれ、あっこ。

亜紀子、後方の道の方を振り向く。深沢が立っている。

亜紀子 : あ。(ゆっくりと2、3歩近付く)

深沢 : どうしたの。

亜紀子 : ええ。(目を落とし、包みを見る。包みを差し出して) あの、これ…

深沢 : え? (けげんな顔)

亜紀子 : 卒業、おめでとう。

深沢 : ああ。(ちょっと照れて) ありがとう。

(笑顔の亜紀子。)

資料2 : 練習用モデル会話

(山田は今日までに提出しなければならない宿題を忘れたので、担当の林先生に事情を話しに職員室へ行った。ドアを開けると、他の先生に声をかけられた)

先生 : 林先生ですか、まだいらっしゃってないけど、宿題?

山田 : え、ええ。

先生 : 林先生のレターケースの中に入れてもいいですよ。

山田 : はい。でも、あの…。

先生 : えっ?

山田 : 林先生にちょっと…。

先生 : ああ、そう。たぶん、もうすぐいらっしゃるわよ。

山田 : はい、すみません。

参考文献

小林由子 (1997) 「日本語日本文化研修コース上級クラスにおけるカリキュラム」『北海道大学留学生センター紀要』第1号、pp.128-144

豊田弘司 (1994) 「自ら学ぶ力の発達」北尾倫彦 (編) 『自己教育の心理学』有斐閣、pp.11-32

中道真木男 (1997) 「伝達行動の学習と自己の意識化」『日本語学』第16巻19号、明治書院、pp.4-11

中道真木男 (1998) 「視聴覚的教育手段の役割」 国立国語研究所日本語

- 教材開発室『視聴覚教材フォーラム4記録』国立国語研究所、
pp.21-34
- 文野峯子（1997）「視覚情報の活用」『日本語学』第16巻19号、明治書院、
pp34-41
- 無藤隆（1980）「自学者を育てる条件」波多野誼余夫（編）『自己学習能力
を育てる』東京大学出版会、pp.156-181

いしじま まさこ（留学生センター非常勤講師）
こばやし よしこ（留学生センター助教授）

Consciousness raising for intonation : audio-visual class in the Japanese Language and Culture Course

ISHIJIMA, Masako and KOBAYASHI, Yoshiko

One aim of the advanced "audio-visual class" in the advanced class of the Japanese Language and Culture Course is to develop oral expression ability. Videos recorded from television have been regularly used for understanding content and for discussion, but the development of oral ability has not been emphasized. Intonation is one of the problems faced by learners in this area, and in the class reported on here classwork for improving intonation using video material was specifically planned. First, learners were required to guess the content of speech in the video material shown without sound, and to produce dialogue accordingly. They compared this with the video. In this way the learners' attention was drawn to information conveyed purely by sound. Next they read the script aloud paying attention to intonation, and then compared their reading performance with the video and imitated the intonation of the model. In this way the learners became aware of problems in their intonation. Finally they made novel dialogues using the intonation patterns in the video material. In the course of this classwork, the learners' consciousness of intonation rose noticeably.